View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

資料・自分と，誰かのために
── 自死遺児たちの分かちあいの会の経験から ──（下）

Experience at a Self-Help Group
── Cases of Suicide Orphans ── (2)

時　岡　　新
Arata TOKIOKA

本誌前号からつづく。以下，資料本文[1)]。

3．自分ができなかった分，気づいてほしい。

大学・専門学校一年生が班員（一般の参加者）となる「山中湖のつどい」は5泊6日，高校生が班員となる各地の「つどい」は3泊4日の日程で行われる。会場となる宿泊施設とのやりとり，会計事務などで育英会職員の手を借りるほか，プログラムづくり，進行，運営のいっさいは年長の大学生・専門学校生リーダーが担当する。ずっと以前からあるスキルや勘どころのようなものを職員，上級生から摂取しつつ，若いリーダーたちは世代の空気にそって時どきの班員たちと向きあっていくことになる。もしそれを知る読み手であったなら，セルフヘルプ・グループ，あるいはピア・カウンセリングといった連想をされても大過ないと思われる。構成員のほとんどが高校生，大学・専門学校生であることさえ，お忘れにならなければ[2)]。

ただし，かれらの経験の全体を，唯「つどい」の数日間だけをとりあげて論じることには，いくらかの不足もある。じっさい，かれらの参加する育英会の具体的活動はこれにとどまらないし，「つどい」で班員をむかえるリーダーのなかにも，上級生になるほど，そのように考え，長期の見とおしをもって任にあたる者がふえていく。

一例を紹介しよう。一般の参加者として来ていた高校生のときには，まったく感じていなかったが，リーダーを何度か経験するうちに「つどい」をいっそう長い時間軸のなかでとらえたり，考えるようになったというF君は，筆者に次のように教えた。自分史を話すことだけが「つどい」ではない，との話題につづけて。

F君「もっと言えば〔高校生のばあいならば〕3年通して「つどい」，っていう考え方を僕はしてるんですね。その段階段階で，「つどい」においてその子が大きくなっていってくれればいいなと。初めてここに来て，初めてほかの遺児の話を聞いたばあいに，ほんとにその子にとって，無理しても話すことがいいのか。『勝負は今，この時しかないからここで話してもらうことがいいんだ』っていうふうに考えるのか。僕はそうは考えてなくて。今年はまずみんなの話を聞いて，一人で感じても

らおうと。その感じてもらったことをまた次の「つどい」で，今度は自分を表現してもらう」[3]。

大学・専門学校一年生の多くは，班員として参加した「山中湖のつどい」につづき，高校生の「つどい」でリーダーを務める。また中には，街頭募金など年間をつうじた活動に参加する者もいる。そうした長い時間をかけて，さまざまに感じ，思い，考える。かれらにとって「つどい」とは，たしかに重要な，しかし一つのきっかけにすぎない。

本稿で聴くもう一人の自死遺児，大学生になってから奨学金を借りはじめたＳ君のばあい，班員として参加した初めての「山中湖のつどい」と，直後リーダーを務めた高校生のための「つどい」にはじまり，一年後，大学二年生としてシニア・リーダーを務めた二度目の高校生の「つどい」にいたる一年間は，迷ったり，疲れたりもしながら，いろいろに思い気づいた時間でもあった。かれにたいするインタビューは，その間に二度，おこなわれた。第一は初めての「つどい」からおよそ半年の後，第二は二度目の「つどい」の一か月後である。本節では前者を，次節では後者を，それぞれ紹介したい。

班員として初めて参加した「山中湖のつどい」，リーダーとして務めた高校生の「つどい」から半年。その後の活動での経験もふくめて，いまの気持ちを訊いた。

Ｓ君「いままでは“自分のこと”，“自分の経験からできること”が頭にあったんです。それが中心で。いまはそれ以外の，いろんな人とつき合っていくなかで，いろんな人の話とか聞いていくなかで，やっぱ，〔高校生の時に父親の自死した自分とは違って〕小さいときに〔親を〕亡くした人もそうだし，病気で亡くした人もそうだし，他のいろんな人，…，親を喪っただけじゃなくて，したしい人を亡くした人もそうだし，もっといろんな人が自分よりも苦しい思いしてるんだなってことを，すごい感じてきて。前までは，自分がやっぱり，自分が苦しかったって思いが，すごい強くて。いろんな人に目を向けられるように，ようやくなってきて。あしなが〔育英会の活動〕へのほんとの意味での参加になってきたのかな，と」。

父親の他界をめぐって，Ｓ君にある苦しい思い。もちろんそれは，いまも，ずっと変わらずにある。かれの苦しさはなにより，“父親のＳＯＳのサインに気づかなかった”という「後悔」に由来する。

Ｓ君「〔自死に先立ついくつもの行動をふり返って〕お母さんが言うには，『お父さんはためしたんだよ』って。〔自分の行動にたいするＳ君たち家族の反応を〕ためしたんだよ，って言ったんです。

／後悔ばっかしてましたね。いろんな人の話とか聞くと，お父さんを恨んでいたとか，いろんな感情がいっぱいありますけど，僕は自分の後悔ばっかです。あの時，話してなかったから。お父さんにとってはやっぱり，すごい孤独感とかあって，苦しかったんだと思う」。

父親の他界後，しばらく学校を休んだ。高校の担任はかれに訊いたという。クラスのみんなには，どうしたらいいだろう。Ｓ君「先

生が勝手に言っちゃえばそれまでなんだろうけど，僕の意思をちゃんと聞いて。だからお父さんが亡くなったこと自体，言わなかったみたいで」。その後，同級生には「お父さんが死んだってことは言えても，自殺ってことは言えないし，いまだに言えてない，ってのがあって」。

やがて大学に入り，あしなが育英会から奨学金を借りる。S君「お母さんが奨学金〔制度〕があるからと。お母さんは前から知ってたみたいで。僕はぜんぜん，そんなの知らなかったですけど。〔中略〕それで，「山中湖のつどい」に行きますよね。やっぱり不安がありますよね」。

遺児を対象とした奨学金なのだから，「つどい」に遺児ばかり集まることは，むろん，あらかじめ知られている。それでもS君のなかには「不安」があった。じっさいには，かれはそこでほかの自死遺児に出会い，安心して話したという。しかしそれを詳しく語ってくれたのは，初めての「つどい」から一年の後，二度目のインタビューのことである。以下ではもう少し，かれの不安な気持ちを訊こう。かれの不安は，おもに，街頭募金など地域での活動に際して，ほかの遺児たちとかかわる場面でのものであった。

S君「〔活動に参加した〕最初は，〔仲間たちには〕親を亡くしている人がいっぱいいるけど，やっぱ自殺っていうものを…。山中のグループ〔班〕には自殺で親を亡くした人がいたから，ま，いいんだろうけど，いろいろ活動していくと，みんなのお母さんやお父さんは病気で亡くなったりしてて，ほんとは生きたいと思ってて，でも生きられなかったお父さんやお母さん，なんだけども，僕のお父さんは違うっていうのは，すごいあって。もしかしたら，あしながの中では，自殺は弱い者がするもんじゃないとかそんなこと言ってるけども，ほんとはどっかで『自殺で自分から命を落とすなんて』って思ってる人がいるんじゃないかなって，すごい不安はあったし」。

先に示したとおり[4]，数の多寡からして，自死遺児をむかえるリーダーや，ともに活動する奨学生のほとんどを病気遺児がしめるのは，むしろ当然である。かれらは自死遺児をどのようにみていたのか。シニアリーダー経験者のひとり，G君に，死因の別による困難の有無を訊いた。

G君「うぅん，（間），死因〔による班分けの重視〕っていわれたのはほんと最近ですよね，あしなが育英会で。（間），そういうふうに，とくに死因分けをするようになってから僕自身は，（間），とくに，自死については，（間），たとえば病気の子のなかに，一人，自死の子がいた場合については，むつかしいんじゃないのかな」。

筆者，それは，たとえばどのようなものだろうか。G君「一般的，に，やっぱり自死の子にとって，お父さんの死をどう感じているかっていう〔こと〕にもよるんだと思うんですけど。自死のこと自体を」。G君はそうと言わなかったが，自死遺児と向きあう病気遺児についても，自死にたいする考え方が問われるはずだ。親の死をめぐる思いにかんしてみれば，遺児と準遺児との関係を参考にすることができる。準遺児とは，親が重度後遺障害者の奨学生をいう。具体的には紹介しないが，親と死別した遺児と親が生きている準遺

児とのあいだに，感情的なすれ違いの生じることもあるという。これと似かよった困難が病気遺児と自死遺児とのあいだにあるとしたら。奨学生として採用し「つどい」への参加をよびかけるかぎり，かれらを放置したり，まして囲い込んだままではなるまい。交通遺児を中心とした育英会スタッフの挑戦がつづいた。

これに，奨学生たちはよく応えたのでもあろう。初めての「つどい」から半年後のＳ君は，不安について，その変化を教えた。

Ｓ君「でもまあ，いろんな人とふれあっていくなかで，そういうものもだんだん薄くなっていって。〔たとえば〕募金のときとか。街頭募金なんかには一生立つもんじゃないって，自分では思ってたっていうか，〔それまで〕考えたこともなくて。募金をやる意味はなんだろうって〔考えた〕ときに，〔募金の地域代表〕から，募金はお金あつめるだけじゃなくて，世間に訴えていくものだよ，っていうことを聞いて。それじゃあ自分が気づかなかったサインを，気づかなかったためにお父さんは亡くなったってことを感じてたから，そういう人を気づいてほしい，っていうことを訴えていこうって自分のなかで決めて，募金に立ったんです」。

かれが自死遺児支援，あるいは自死を考えるほど苦しむ人びとに「気づいてほしい」と社会に訴えた機会は，これまでに，街頭募金など二回。それはかれ自身の父親にたいする思い，自死についての考え方，活動する仲間たちとの間合いなど，それぞれが絡みあい，深まっていく時間となった。

筆者，それらをふまえて，あらためて訊きたい。お父さんはどうして死を選ばれたのだろう。Ｓ君はやや詳しく，他界にいたる経緯を話してくれた。そうして，ひとこと，言った。「まあ，ちょっとわけ分かんないですけど。お父さんが死んだ理由ってのが」。

いくつかの思いあたる事ごとを挙げて，かれはつづけた。ほんとうは，早くみつけてもらおうと思ってたんじゃないか。死のうとする人が，そんなことするのか。ふつうに考えたら，しないですよね。筆者はそこで，先にＳ君の言った「僕のお父さんは違う」の言葉を思い返して訊いた。それでも，病気で亡くなったお父さん，お母さんたちと違うように思う？　Ｓ君のお父さんだって，生きたかったんじゃない？

Ｓ君「うん，僕はそうなんだけども，ほかの人からみたら，自殺っていうことにはかわりないでしょ。ま，そこまでくわしく話したら，分かるかもしれないけども」。

筆者にいっそう印象的なのは，これにつづく言葉。

Ｓ君「でも，自殺っていうものの，やっぱりイメージっていうのが，僕のなかでもたぶんそう思っちゃってて。みずから命を落とすっていうことだから」。

父親は，近しい人の病死を経験していたという。その家族をみれば，遺された子どものつらさを，たぶん知ってるはずだ，と。

Ｓ君「そういうのも知ってるのに，なんで自殺するんだろうっての〔という父親にたいする気持ち〕もあって。やっぱり，そこに結びつくんですよね。自分

の父親はほんとに死にたくて死んだわけじゃないってことは〔自分としてはそう〕思うんだけども，ほかの人からみたら，やっぱり。闘病生活して亡くなったっていう人もいっぱい…。もう生きたくて生きたくてしょうがなかったのに亡くなった〔人もいる〕，と。たぶん自分〔が病気遺児〕だったらそう思うな，って思ったんですよ。自分の親が病気で亡くなってたら，自分の父親は生きたい〔と思っていた〕のに死んだのに，なんでみずから命を落とすんだよ。ならその命分けてくれよ，っていうふうに」。

さらに重ねてＳ君は思う。しかも僕は，苦しむ父親が自分にむけて発したサインに気づかなかった。あの時，父親のところに行かなかったのだ。「適当な理由つけて，逃げてただけで」。

いまとなっては不明を恥じるしかないのだが，このとき筆者は，自分の聞きたい言葉を追って，質問をくり返してしまった。なん度かのサイン。それでもＳ君のお父さんは，病気で亡くなった人とは違う亡くなり方なのかな。

Ｓ君「や，なんにしてもやっぱ，違うものは違う。〔筆者の顔をみながら〕どこが違うか，ですよね。（長い間）。生きる死ぬ選ぶときは，苦しいのから逃れたくて，死ぬ。生きるって決めたときは〔生きていて〕もっとさらに楽しいことがある。どっちにしても今の苦しい状況からは脱したい，っていうのがあって，それを父さんは言ってたんですよね。そのための一つが，僕に声を出すことによって，自分のことに気づいてほしくて。今の気持ちを楽にしたいっていう思いと，でもそれができなかったから，もう，この場を抜けるためには自分の苦しい思いを断つしかない。それが死…，に結びついたんですね，僕の父親のケースでいうと。今の状況から脱したいっていう思いで，もっといい方にいくか，今の苦しみを消すか。そんな選択は，病気で亡くなる人は，できない。自分の死っていうのがみえてるわけで。もう〔遠からず〕死ぬことは，分かってない人もいるかもしれないけど，分かっていて。〔自死のばあいは〕選択ができるのに，命を落とすっていうことで，かたづけてしまったってことの，違い，じゃないんですか」。

いまなら，それはＳ君が，かれ自身を責める言葉だとみることもできる。筆者はそれに気づかなかった。ほんとうに，もうしわけなく思う。

わずかに距離をとって，Ｓ君の言葉から連想される自死遺児の思いを，ごく大づかみに整理しておきたい。なによりもまず，かれらは父親，母親の自死を人に言うことができない。「自殺ってものにたいする偏見っていうか，自殺を別物としてる」。「ある宗教では大きな罪になる行為だし」。自死と聞いた人びとの反応を考えると，言えない。「みずから命を失うっていう行為そのものが，悪いものだっていう考えで，自分もいた」。たぶん世間もそうだろう。さらに理屈が重なる。病気など，生きたくても生きられない人びともいる。「そういう人が生きれないのに自殺するのは，ひどいことだ」。自死という行為そのものが否定され，いままた，他人との比較によっても非難される。病気で大切な人を亡く

した悲しみを知れば，その思いはいっそう強まる。

たいせつな父親，母親への否定，非難。けれど父親は，母親は，ほんとうは死にたくなかったのではないか。思いだしてみれば，いく度となく，死にたくないと言ってはいなかったか。助けてくれとサインを出してはいなかったか。自分はそれに気づかなかった。死なせてしまったのは自分だ。そればかりか，死んでなお人びとから否定され，また非難される。そうしてしまったのも，自分だ。ほんとうは生きたかったとしても，ほんとうに死にたかったとしても，赦されない。だから，思いきり悲しむことも，安らかに眠ってほしいと願うことさえ，むつかしい[5]。

もちろん，これが自死遺児すべての思いというのではない。お父さん，お母さん，お疲れさま。心からそう思うかれらもいる。とくに苦しみに照準して，また“世間”とのかかわりに軸足をおいて，列挙したにすぎない。

S君の回想にもどろう。筆者のくり返しの質問にこたえた後で。S君「まあ，〔この地域〕では自死遺児が僕だけ。〔厳密には〕僕だけじゃないけど，先輩とかにはいないっていうのも，たぶんあると思います」。「で，一時期はあしなが〔育英会〕が，〔活動のなかで〕自殺のことを取りあげてるだけでも，ちょっと。自分でもそれに乗っかって，それでいろいろ言ったりしてたんですけども，なんかイヤだなって思ったことも，ありましたし。認めたくなかったのかな，自分の親が自殺ってことを。一緒に活動してる仲間は〔父親の自死を〕知ってるけども，もしかしたら自殺にたいしてそういう目でみてるのかな，ってこともあったんで。そのまんま，「つどい」終わって，募金やってとか，そういう，そのままの流れに乗ってくのはイヤになってしまったことがあって。ちょっと，一回考えたいな。そのままの流れに乗っていきたくないな，って思いがあって」。

かれが「いろいろ言」う大きな機会とは，自死遺児支援を呼びかける街頭募金と，チャリティイベントのPウォークである。「それまでは募金が主ですけど，自分がやるべきことがあると思って。それは，ほかの人に，〔かれの父親のように〕サインを送ってる人がいたら気づいてほしいって思い。それだけでやってたから，自分がやる意味ってのがあったし。自分がたぶん成長できるなって思いもあったし。Pウォークもそんな感じで，やってきて。でも，まわりの人は，誰かのためにとか，すごいいっぱい言ってて。でもそれがまだ，自分のなかでは誰かのためにやろうっていう思い，その余裕がなくて」。

なん度かミーティングを休んだ。ちょうどそのころ，地元の高校生，大学生遺児とボランティア・スタッフの交流をはかる新年会が企画された。S君「新年会をやろうっていう人の話とか聞いてるうちに，〔自分からやりたいとは〕あんまり思ってなかったですけども，ちょっと，やろうかなっていうふうに，なんとなくそういう感じになって。新年会を終えて，やっぱり自分がやることが大切かなって思って。ほかの人はあまり自殺のことを…，自死遺児じゃないからっていうのもあるし。自分がやらなくちゃいけないな，自分がやりたいな，っていう思いが，また，芽生えてきて。ようやく最近，やっぱり，誰かのためにやろうってのが出てきたんです」。

筆者，S君の考える“自分のため”と“誰かのため”の違いは，どこにあるのか。

S君「募金も，誰かに気づいてほしいっていう〔ことを訴えるのだから〕，誰かのためっていったら誰かのためですけどね。でも自分ができなかった分，気

づいてほしいっていう思いで，いた。〔だから〕そう〔気づいてほしいと〕言ってただけで。自分のなかで〔それが〕誰かのためという思いは，なかったですね」。

聴きながら筆者は，自死遺児支援をうたう一連のキャンペーンのなかで，印象にのこる一場面を思い出していた。街頭などで「お父さん死なないで」と訴えつづけたある日，育英会の事務所に一本の電話がはいる。見知らぬ“お父さん”の一人から。「死のうと思っていましたが，あなたたちの話を聞いて，死なないと決めました」。電話を受けたという交通遺児の目には，涙。それを筆者は，かつて父親を殺した暴走車への敵討ちと，ともに訴えた仲間たちへのねぎらいと，死なないと言った父親をもつ子どもたちへの思いとがまざり合ったものとみた。すべてにかれ自身を重ねていると，感じた[6]。

Ｓ君の言う，自分ができなかった分，気づいてほしいという思い。誰かのためにという思い。それもきっと，いくつもの後悔や念いがいろいろに重なりあった複雑な気持ちであるに違いない。

筆者，いまあなたの言う“誰かのため”というのは，つまり，自死を考えるような状況にある人たちの苦しみに気づいてあげてほしいということ？

Ｓ君「〔即答して〕ううん，〔それ〕だけじゃなくって。〔いまは〕もう，自殺以外のことも考える。僕は高校のときに〔父親が〕亡くなってるけど，ちっちゃいときにお母さんを失った子とかを対象にして，この前も〔地域の「つどい」のような催し〕をやったし。そういう活動をやっぱり，もっといろんな人に広げたいなとか，そういうことを思ってきて。そうするなかで，〔その人たちが〕安心できるように。自分もそうだったから」。

Ｓ君の「誰かのため」のとりくみはそれからもつづき，インタビューからさらに半年の後，二度目の大学生，高校生の「つどい」にいたる。直接にはそれら年下の遺児たちのための活動を経て，かれの心情，考え方の軌跡はいかなるものとなったか。次節でくわしく訊こう。

４．父親の身になって，考えられたかな。

01，02年の「山中湖のつどい」をつくった上級生リーダー，参加者のみなさんには，とくべつの感謝を言わなければならない。育英会の活動や「つどい」について，ひろく社会に知らせる目的から，筆者をふくむ何人もの元・学生をそこに同席させてくれたからである。ハイキングでもスタンツでも，みなさんとかわらないつもりでいたのですが，記念写真の中では，おじさん顔ですこし目立っていたかもしれません。ほんとうに，ありがとうございました。

あらためてこう書き述べるのには，いくつか理由がある。筆者は「つどい」を一種のセルフヘルプ・グループ，ピア・カウンセリングの場とみている。筆者らをそこに居させるのはたいへんな負担であったろうし，本来さけるべき状況を，強いて用意していただいたからである。そうでありながら，いまだ「つどい」がどのような場であるか，じゅうぶん表現できずにいるからでもある。

もっとも長く筆者に「つどい」を教えてくれる一人，Ｙ君は，それを「異世界」だと説明する[7]。「それはもうまさに，“素”になってもいい，世界」。筆者が書く「つどい」と

あなたがいちばん言いたいこととは，どのようにズレているだろうと訊いた。Y君「それは，「つどい」を班員として体験しているなかでも，もう，すごい大切なものなんですよね，僕のなかでは。この場が，この雰囲気が。それをたとえば『遺児たちが集まってそれぞれのつらい体験を話しています』みたいな感じで。それだけしか表現してなかったんですよね。僕のなかでもつらい経験を話すことは大事だったけど，（間），なんだろなあ，参加者どうしの一体感とか連帯感がいちばん強かったような気がする」。

筆者，一体感とか連帯感とは？　Y君「うぅーん，つらい経験を話し合ったことは，基本で」。でも「つらい経験を話しただけじゃないんだよ，コラっ，っていうのが（笑）。それを表現するのがねぇ，どう言えばいいんだろうねえ（笑）。話したことも，重要で，話せる仲間を得たことも重要だし」。「肝心なのは，その話し合った仲間の存在，で。話し合ったことじゃない，と」。

おなじく年長の遺児学生Kさんは，「自分史〔を話すこと〕が重要だっていうのもあたりまえのことだと思うし，でも自分史だけが重要なことではないっていうのも，それもあたりまえのこと」，という。

Kさん「いくら同じ境遇の人だよって言われても，同じ死因〔で親を亡くした子どもたち〕が集まってるよって言われても，会ってすぐに話せるかっていったら，そんなわけないじゃないですか。いかに，その班のなかで話せる状況にもっていくか。リラックスできる状態にもっていくか。

／で，話すことによって，逆に安心感がうまれたりとか，連帯感がうまれたりとか。

／全然いままで話したことのない，誰にも話さないようなことが話されて，それに共感する子も出てきて。もっと話したいと思う子が出てきて，もっと一緒にいたいっていう子が出てきて。それがあって，ぎゅっと固まって。そっからは，いかに今度はこれから，そういう繋がりを続けていくか」。

もう一度，Y君に訊こう。「つどい」の自分史語りの時間について，筆者には二つのナゾがある。まず，なぜ話そうと思うのか。Y君「いちばん大きいのは，どんなことを言っても支えてくれたり，うしろから肩をたたいてくれるようなリーダーがいて。この人は俺を気にかけてくれてるんだと，ずっと思えていて。その安心感から，班員十何人の前で話すわけですけど，でも実際にいちばん話してるのは，リーダーなんです。リーダーに聞いて欲しい，って」[8]。

では，自分史を話した後，たとえば食事の時間，静まりかえるでもなく，誰もみなそれまでどおりなのは，なぜか。Y君「〔大学生の「つどい」を念頭に〕僕が思うのは，大学一年生の半分以上が高校生で経験している。すると〔自分史を話した〕その後，自分がどうなるかっていうのを大体分かってたり〔する〕。〔あるいは高校生のときに〕つらいことを話してるから，話すことにあまり抵抗もなかったり，しているわけで。そういった子たちがいるのが一つ。またそういった子たちが，初めての，〔感情が高ぶって〕わぁってなる子，泣き出したりとかする子たちに，とにかく安心感を与えてるんだな，と。気持ちが盛り上がって，わぁってなってる子にたいして，落ち着いて対処してあげてるんじゃないかな，と。だから，案外ふつうにしてますよね」[9]。

Y君の経験のごく一部をまとめれば，おお

よそ次のようになる。初めて「つどい」で話して「正直，自分に驚いてましたね。俺はこんなに，こんなことを思ってたのか。思ってたけど，そんなこと口に出しちゃったよ」。「リーダーが話して，別の子が話して。すごい気持ちが伝わってくるんですよ。そういった気持ちが自分に入ってくるから，つらい体験を言うことを止めていた，喉にあるその止めを，伝わってくる心がとっぱらっちゃったのかな」。かれにとってそれは，一つの“スタート”になったのだという。「このスタートは，なければないで，ふつうの生活が流れていくわけですよね。自分のことを見つめることも，ままならない。ふり返ったりするスタートが必要だから，こういう異世界は必要だ，と」。〔筆者，合の手，でもそれはあくまで“スタート”だから，それ以降は異世界でない世界で…〕「そうそう。これ以降のふだんの生活で，どれだけ自分が考えたり動いたりするか，ですよね」[10]。

むろん，誰もがY君とおなじように思うわけではない。あくまで一つの典型例とみるべきであろう。数日間のはじめにリーダーが自分をさらけ出す，班員のことをなにより気にかけていると態度で示す。書いてしまえばこれだけのこと，高校・大学生たちにそう思ってもらう困難さを表すのは難しい。これを前提として，リーダーから自分史を話しはじめる。この人に，この人たちになら話したいと思えば，班員たちも話す。話しおえた直後，気持ちが「波立っている。津波状態」。けれど，まわりはみな変わらずに接してくれる。少しだけ先をいく仲間たちが安心させてもくれる。もし来年も参加すれば，今度は自分があとから来る仲間たちをむかえる。リーダーになれば，その場，その雰囲気をつくるため力をつくす。

多くのセルフヘルプ・グループにみられるとおり[11]，「つどい」にも，運営にあたる上級生の参加者と，班員と呼ばれる一般の参加者とがいる。班員にとって上級生リーダーの存在が大切であるのとおなじく，班員の応答さらには支えなしに，リーダーがその任を務めることはできない。このときリーダーたちは，それらの経験をとおして，班員として過ごした以前の自分たちをふり返り，いろいろに思いめぐらす。それは，自身にとっての自分史語りを，それぞれに意味づける機会ともなる。

いま，大学二年生になったS君も，そのような一人であった。かれはこの夏，「山中湖のつどい」にリーダーとして，高校生の「つどい」にシニアリーダーとして参加する。二度目のインタビューは，それからおよそ一か月後に実現した。

S君「やっぱり，山中湖でリーダーやったのが大きくて。自分の経験を話すときに，ほんとに，聞いてるみんなの表情を見て，話せて。みんなに感じてもらうことができたんじゃないか，と。班のなかに自死遺児の子がいて，その子たちは，みんな泣いてたんですよ。心に，なにかしら感じてくれたのかな，って思って」。

筆者，去年のこと，班員として参加したときのことは，覚えてる？

S君「何人か話して，自死の子が話した後に，自分も話してから帰りたいって思って，話して帰った。もちろんはじめて会ったし，遺児と。それはすごい，うれしかった。〔筆者，うれしいっていうのは？〕　同じような思いをしてる人がいるっていうことを，じかに目の

前で見て，感じてるっていうのが。ここで話せるんだなあ，っていう」。

ある班員が，自分は自死で父親を亡くしたと言った。「ほかにも〔病気遺児などが〕いたんだけど，全然聞いてなくて」。山中湖では班を二つに分けて自分史を話すのだが，そのグループ分けの時も「もう，その子と一緒になりたいっていうことだけ。その子の話を聞きたいということかもしれないし，その子とだったら安心できるって思ったのかもしれないけど，やっぱりそれはすごい大きい」。

筆者，リーダーやシニアリーダーを務めたとき，班員にも同様の気持ちがあると感じたか。S君「すごいあると思う。とくに，自分が話した後に班員の子の表情を見て」。

もちろん，かれは班全体のリーダーであったから，自死遺児ばかり気にかけていたわけではない。S君「逆に，そうじゃない子に，心配はありますよね」。「自分が話して，班員の，自死の子たちの表情を見て，一人ひとり，心に感じたことがあったんだなって思った。で，一方そうじゃない子たちが，唖然としたっていうのかな，やっぱ衝撃的過ぎたのかなっていうふうには感じましたね」。

機会をあらため，筆者は，S君とは別の自死遺児リーダーの話を聞いた参加者の一人に感想を訊いてみた。H君「基本的には，だからどうっていうのはないんだけども，すごく衝撃的ではあった。こんなことも話していいんだみたいなところは，ちょっと思った。そんな人もいるんだ，とか」。「へんな話，このリーダーがこんなに，ここまで自分をさらけ出して話してくれるんだから，自分もさらけ出そうかなっていう気持ちに，なるときもあるんですよね」。

先にG君に訊いた，いわゆるカテゴリ分けの重要性，話しやすさについて，S君はどのように考えているだろうか。

S君「同じ方が話しやすいっていうのは大きいと思うんですけど，一緒だから話しやすいかどうかは，分かんないですよね。進行の仕方だったり，前に話した子の話だったり，話し方だったり。そういうのもまた，すごい大きいかなと思います」。

筆者，では，自死遺児のみの班を作るならばどうだろう。

S君「それは，きびしい，かな。自死遺児ミーティングとかありますから，その場ではすごいよかったけど，「つどい」の場でそれは…。ほかの班もあるわけじゃないですか。あ，〔自分たちは特別に〕固められたんだなあとか，思っちゃうかもしれないし。やっぱりほかの経験の人〔の話〕も聞きたいってのが，あります。そこで聞いてはじめて分かるってのもあるし」。

筆者，ほかの遺児の経験を聞いて分かることとは何だろうか。

S君「僕はそれが大きかった。初めての山中湖で，自死の子の話を聞いたのもあるし，一方，幼い頃に亡くした，だからお父さんの記憶がないっていう〔遺児の話を聞いた〕ことに，僕はすごい衝撃をうけて。お父さんとの楽しい思い出もないんだっていうことに，自分はまだ幸せだったのを感じた部分もあった。自分とおなじ人がいる，ああ，おなじなんだ，っていうのもあったけど，お父さんの思い出がないっていう子の

方が大きかったっていうのを，いま，思い出しましたね。お父さんとの思い出がない。僕はあるから，楽しい思い出もあるから，それだけ自分が，よかったなあって感じた。その子は自死遺児じゃないんだけれども，それがすごい大きかったですね。もっと苦しい思い，苦しい思いもできない子もいたってことだし。亡くなったときの悲しさも感じなかった子，それも，もっとつらいんじゃないかなって，思ったし。いろんな子がいるなかで，こういう時にこういう苦しみもあるんだなあと。苦しまない苦しみっていうのか，そういうのも感じたし。だから，多少いろんな子がいた方が，そういう，いろんなことが感じられるかな，と」。

筆者の知るところを補っていえば，上述のコメントは，かれの年下のきょうだいを思いながらのものではないか。聴き手として，そのようにも感じられた。

いずれにせよ，どれか一つが妥当というのではない。S君は自分だけでなく，班員それぞれを思いうかべながら，あれこれの場合を挙げた。親の闘病期間中に感じたことがおなじだったら，共感することもあると思う。自死の場合は，自死，それだけで一緒なんだと思うところがあると思う。なにかの共通点，その一つとして死因がある。そうして，かれは，表情になにも出さない参加者の気持ちにも目をむけるようになったという。「病気で〔親を〕亡くしてる人だって，その人の苦しみもすごいあるっていう〔ことを知った〕。自殺が一番大きな苦しみっていうわけでもない。闘病生活の苦しみだったり，すごい大変な思いをしてたり」。

だから，というようにハッキリ言えるわけではないが，「つどい」のあいだ，自死にたいする偏見のようなものをとくに意識して話したことはなかったという。しかし，もちろんそれは，かれが父親の自死を誰にも言えるようになったということではない。「やっぱり，「つどい」じゃない場って，すごい，だめですよね，いまでも。「つどい」っていうか，あしながの活動やってる仲間，以外の場だと。だめですよね，まだ」。

ところで，この一年のあいだにかれが参加した自死遺児支援を目的とする活動は，「つどい」のほか，自死(遺児)をテーマに秋田で行われたシンポジウムと，何度かの自死遺児ミーティングである。それぞれについて訊いた[12)]。

S君「秋田〔シンポジウム〕はまた〔「つどい」とは〕違いますよね。そこでやっぱり，父親のことを考えた。シンポジウムで話している人〔パネリスト〕の話を聞きながら，自分の父親もあの時サインを送ってたんだなとか，あの時ほんとうに追いつめられてたんだなとかいうこと。父親のことを分析できた。父親の身になって考えれたのは，そこから。その後に〔自死遺児〕ミーティングがあったときに，『自分もこういう思いをしたから，人にはしてほしくない』っていう思いが生まれはじめた」。

筆者，専門家の話は，あなたにとって考えるきっかけになった？

S君「大きかったですよ，すごく。なんか自分中心でしたね，「つどい」では。自分がつらくて，もっとつらい人もいる，っていう感じで。父親のことじゃないっていうか，自分の気持ちが中心

で。秋田で，前の方々〔専門家〕が話しているのを聞いたときに，父親の身になって考えられたかな。父親が，ああいうときはああいう思いしてたのかなって想像したり。だから秋田のシンポジウムでは，自分史話した人のとき〔自死遺児の体験発表〕よりは，そういう，前の人〔専門家〕の話を聞いてて父親のことを思い出してきて，泣けてきたんですよね。ああ，あのとき，ああいう思いしてたんだっていうことを想像して。それで，父親のことについて考えるきっかけになりました」。

秋田のシンポジウムでは，その日のうちに引きつづき，自死遺児ミーティングが開催されている。ふたつのプログラムの接続は，いわゆる専門家から提供された情報を，自死遺児どうしのミーティングの場をとおして，かれら自身が咀嚼していく好機となった。それはまた，専門家と当事者とが，間合いよく出会った好例ともいえる。筆者，自死遺児ミーティングについて思うことはあるか。

S君「あれは，なにかやりたいっていう思いが，すごい〔強い〕。だからその前に「つどい」がなきゃ，ぜったいダメですね。いきなりあそこに行っても。／「つどい」では，話を聞いたり自分の話をしても，なにかそのためにやりたいっていう思いはもちろんなくて。自死遺児ミーティングで集うことで，話を聞いたりすることで，自分もなんかやりたいなって思って。先輩の人たちがやってきたことを聞いたのもあったかもしれないけど，自分もなにかやりたいってすごい思ったのは，その場所でした」。

筆者，そこで，自死遺児だけが集まることの意味は何だろうか。S君「はじめっから安心できますよね，〔自死遺児だと〕分かってるから。そのまえに「つどい」とかもあったし。初めて会う人だけども，もう分かってるから」。「先輩たちがやってることを聞いてびっくりした。なんでそんなにできるんだろう。文集作ったり，自分の体験を人に，いろんなところで言ってるとか聞いて。自分にはできないなあ。でも，何かできるかなあ。自分が話したりすることはできないけど，何かできることないかなあと考えはじめたのは，すごくいいことだと〔思っています〕」。

わずかにふれておくが，自死遺児ミーティングとて，すんなりと「何かやろう」と心に決め，そして実行したわけではない。それら逡巡や困難についてはいつの日か，かれらとかれらを支えた人びとの自省のうちに，話されることもあるだろう。

S君に話を訊いたころ，活動の集大成として単行本づくりが進められていた[13]。筆者，あなたのばあい，どんな気持ちでそれにかかわっているの？

S君「やっぱり，まわりで苦しんでいる人に気づいて欲しいっていう〔気持ちです〕。自分には後悔っていうのがあったんですよね，〔父親の苦しみにたいして〕何もできなかった自分。〔だから〕後悔してほしくないって。／もちろん，自殺をしようと考えてる人に思いとどまってほしいとか，そういう思いもいっぱいあるんだけども，やっぱり自分のなかで一番感じてるのが後悔っていう思いだから，気づいてほしい，苦しい思いをしている人に。自殺まで考えなくても苦しい思いをしてる人，いっぱいいるわけで。そうい

う苦しい思いをしている人に，真剣に向きあってほしいな。そうしたら苦しい思いする人も，苦しい思いをして自殺まで考える人も減るだろうし。そしたら自殺，減るだろうし。気づいて，もっと真剣に向きあってほしいっていう思いが，一番つよいです」。

筆者，そういう活動をしていて精神的な疲労などはない？　Ｓ君「うぅん，まあ，やりたいと思ってやってるから，ないですけど。でも，高校生に〔手記を〕書いてくれとか，母親に書いてくれっていうのは，僕の口からは言えないですね。自分はそれだけの，「つどい」だったり，ミーティングだったりをして，自然に自分が感じてきたものだから。そういうのがない人には，あんまり，書いてくれっていうのは自分の口から言えないですよね。すごい大きな問題だから」。

Ｓ君がこの一年をとおして感じてきた事ごと，またその機会となった「つどい」や自死遺児ミーティングについて，筆者はいまだ，学びの緒についたばかりである。わずかに自信をもって報告できそうなことは，筆者の話した遺児たちのほとんどが，「つどい」を説明するのに「きっかけ」の語を用いたことくらいである。何のきっかけになったのかは，一人ひとり，まったく違う。ゆるやかな類似点のひとつは，故人について思う手がかりを得たことだろうか。Ｓ君は，幼い頃に父親を亡くした参加者の話を聞いて考えたという。他方，父親がいないことがあたりまえだったＫさんは，リーダーを経験するなかで，父親について考えはじめた。

Ｋさん「親がいて，自分が生まれてきたっていうところにようやく気づいた時に，どんどん，親のことを知りたくなる。じゃあなんで自分が生まれたのか。自分が生まれたことがほんとによかったのか。母はそのときに，どうだったのか。っていうのを考えて，しかも，考えたりしたことを聞いてくれる，相談にのってくれる友だちが近くにいるっていう，その事実は，すごく，かけがえのないものだと思うんですよ」。

／ぜんぜん違う死因だったとしても，自分の親はどうだった，って悩んでたり，その時こう思ったっていうのが，自分とリンクしてたりする。そういうことをどんどん続けていくうちに，忘れたかったこととか，心の奥底に押しこめていたものが，ちょっとずつ出てくる。それが，気づかないうちに自分の行動に反映していたものもある。あぁ，自分はこれがあったから今までこういう行動をしてたんだな，っていうことが分かったりする。たとえば，大人の人が怖かったりとか，大人の男の人としゃべれなかったりする子がいたときに，ただ単に苦手だからって思ってたものが，話をすすめて自分で考えていくうちに，お父さんがいないことで，その年代の人と話すことを知らないから話せなかったんだってようやく気づいたときに，だからなんだって理由が分かっただけで，ちょっとずつ話せるようになっていったりとかする。そのきっかけかなって思うんですよ，「つどい」なり，自分史〔語り〕なりは」。

もちろん，それで変わる人もいれば，変わらない人もいる，と彼女はつづけた。「そこから，そういう機会に何度かめぐまれるか，そこで，ああもう嫌だって思っておわってしまうかは，それは自分で選択することだし。

まわりにどれだけ，そこを考えさせてくれる友だちがいたか，っていうところもでかわってくると思うんですけど。だから，自分史一回やったからじゃあその自分史がよかったかっていったら，一概には言えないと思うんですよ。ただ自分史が重要だって思うのは，それがひとつのきっかけになってるって，絶対的に思うから」。

ふり返ってみれば，かれらにとって，日日の生活で故人を思うことは，たいそうむつかしい。「つどい」は幾とおりもの意味で，出会いの場，なのである。その一例を紹介しながら，稿を閉じていこう。

はじめの節で話したN君には，「つどい」のなかで，心に響いた三つの言葉があるという。そのうちの，ひとつ。

かれは大学二年生のとき，リーダーとして高校生の「つどい」に参加した。「そこにGT先生がいて。息子さんも連れて来られて。その頃からちょうど，自殺っていうものが取り上げられはじめてて。で，〔「つどい」最終日の〕キャンプファイアーの時」。GT先生は子どもを呼び，ぐっと持ちあげ，抱きかかえた。

「おい，みんな，よく聞け」と。「みんなのお父さんは，みんなをのこして，確かに死んでいったのも事実だけれども，みんなを見捨てて死んでいこうなんてのは，けっして思ってないから。俺はこの子をのこして，確かにちょっとお金とか結構キツくって，まあ，お父さんなりの苦労をしてるんだけれども，この子をのこして死んでいこうなんて，ぜっったい思わない。子どもを思わない親はいないんだよ」。そうして，言った。だから，自分を責めるんじゃない。

そのときN君は，かれの父親の声を聞いたに違いない。筆者はそう思った。それは感傷に過ぎるといわれそうで，口には出さなかったけれど。

おわりに.

N君の心に響いた三つの言葉。その筆頭にいわれたのは，かれのしたしい先輩が「山中湖のつどい」総合司会として，キャンプファイアーのとき語った言葉だった。――

「僕はいつも父親〔おやじ〕を目指してきた。でも，父親は，とつぜん僕の目の前からいなくなってしまった」。かれは，炎のむかう先，星空を見上げて言った。

「お父さん！，僕はあなたの23歳をこえていますか。僕はあなたの23歳と，肩をならべていますか」。

――「その時，僕，すっごい感動して。ああ，そうだな，お父さんにも23歳の時期があったんだなあ，って」。筆者のインタビューに応えたこの夏，N君もまた，おなじ歳をかぞえた。

三つの言葉，そのもうひとつは「〔キャンプファイアーのときに〕毎年うたってくださる，HD先生の『ヨイトマケの歌』」。筆者もいく度かそれを聴いた。なるほど，これは逸品。うたに泣いたか声に惚れたか，最終日の夜に毎年かならず一人や二人，これを唸るやつがいるのは，男風呂だけの現象か。

あらためて言うまでもなく，本稿はかれらの経験のごくわずか，一面を粗描しただけにすぎない。それぞれに「心に響いた言葉」があり，また誰もがそこで楽しいときを過ごしたわけでもないだろう。多くの「つどい」参加者に不足の赦しを乞いたい。

あわせて，読み手に注意をうながしておきたい。かれらは街の若者たちとなんら変わるところもない，ごくありふれた高校生，大学生，専門学校生である。たしかに山の上〔筆者の参加する高校生の「つどい」会場は，文字どおり高地にある〕のリーダーたちは，学

生に見えない。筆者が勤務先で接する大学生とおなじとは，とても思われない。しかしひとたび山を下りれば，制服を着た修学旅行生とさえ区別がつかない。「つどい」帰りの電車ではしゃいで騒ぎ，乗り合わせた人びとに眉をひそめさせもする，筆者やあなたの毎日すれちがう，子どもたちなのである。

夜食に持参したポテトチップの袋は，山に上るとはち切れんばかりにふくらみ，山を下りるとしぼむ。気圧の変化は，かれらに，いつもとちがう音を聞かせ，ちがう声を出させるのかもしれない。

資料本文，以上。

註

1）インタビューの実施時期は，2002年３月，８月，９月。場所は，遺児たちの「つどい」会場，あしなが育英会事務所，遺児自宅。いずれもテープ録音により記録した。

2）いわゆる“遺族の会”を実践する立場から，みずからを自助グループ，セルフヘルプ・グループとみなす例としては，若林一美『死別の悲しみを超えて』岩波書店（岩波現代文庫），[1994]2000年，27，176，210頁などがある。

3）本稿が遺児たちの「つどい」，とりわけその中心的プログラムである“自分史語り”（具体的には各会場ごとに，たとえば「自分史の時間」「自分を語ろう」などと呼称される）を「語りあいの会」ではなく「分かちあいの会」と表現するのは，上級生リーダーたちのこのような姿勢を重視するためである。じっさいの“遺族の会”でも，語ることにまして時間と空間の共有にいっそうの意義をみとめて，みずからの活動を「語りあい」ではなく「分かちあい」であると説明することがある。

4）前稿，時岡新「資料・自分と，誰かのために（上）」『金城学院大学論集　社会科学編』第４巻第１号，2007年，102-103頁。

5）自死遺族当事者の経験については，高橋祥友『自殺，そして遺された人々』新興医学出版社，2003年，グリーフケア・サポートプラザ（編）『自ら逝ったあなた，遺された私』朝日新聞社，2004年などに詳しく紹介されている。

6）ここでいう「敵討ち」の発想は，直接にはあしながが育英会職員との交流のなかで筆者に知られたが，それらは後に，副田義也によって詳しく分析された。副田義也『あしなが育英会と玉井義臣』岩波書店，2003年，６-11頁。

7）詳細は，拙稿「言わないという不快，話せるという安堵 ── 遺児の語りあう経験から ──」『社会学ジャーナル』第28号，筑波大学社会学研究室，2003年，113-142頁を参照されたい。

8）筆者は後にこれに照準して，おもな聴き手であるシニア・リーダー経験者に，その姿勢と技法を詳しく訊いた。拙稿「分かちあいの会で語りを『聴く』作業について ── 遺児たちの『自分史語り』のばあい ──」『金城学院大学論集　社会科学編』第３巻第２号，2007年，44-65頁。

9）かれらの“自分史語り”の経験を段階論的にみて，それぞれの特質をまとめた一例として，拙稿「故人をめぐる対話 ── 子どもたちによる“分かちあいの会”のばあい ──」『年報筑波社会学』第15号，2003年，82-93頁がある。

10）遺児たちの「つどい」での経験と日日の暮らしとの繋がりと隔たりについては，拙稿「『当事者グループ』経験の諸過程 ── 遺児たちの『つどい』に取材して ──」『社会学ジャーナル』第29号，筑波大学社会学研究室，2004年，199-217頁で詳説した。

11）たとえば，高松里「セルフ・ヘルプ・グループにおけるリーダーシップ」『教育と医学』43(9)，1995年，11-16頁，高松里『セルフヘルプ・グループとサポート・グループ実施ガイド』金剛出版，2004年を参照のこと。

12）かれらの活動の概略については，自死遺児編集委員会・あしなが育英会(編)『自殺って言えなかった。』サンマーク出版，2002年，221-226頁を参照されたい。

13）前掲書『自殺って言えなかった。』のことである。